

第5回 暦博国際シンポジウム
「古代東アジアにおける倭と加耶の交流」に参加して
『加耶の鉄と倭国』
2002. 3. 13. 千葉県佐倉市 国立歴史民俗博物館



2002. 3. 13. から 4 日間 韓国と日本の考古学の先生中心に古代日本の成立に大きな影響を与えた朝鮮「加耶」と「倭」の交流について、最近の日本・韓国の発掘調査結果などを踏まえて「古代東アジアにおける倭と加耶の文化交流」についての国際シンポジウムが千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館で開催された。このシンポジウムの初日に「加耶の鉄と倭国」のテーマで古代日本の製鉄のルーツや朝鮮半島の辰韓・加耶の鉄が古代日本成立にはたした役割等が新しい考古学調査を基に討論された。

「日本の古代製鉄のルーツは大陸・朝鮮にあることが定説になっており、この鉄の覇権をめぐって展開されたドラマが日本誕生に深く結びついている」と言われ、弥生時代から古墳時代そして大和朝廷の時代へと紀元 2~7 世紀の古代和鉄を探ってゆくと常に行き着く「朝鮮半島加耶の鉄」。

自分の知識と言え、情報が断片的で、時代もきっちり把握できておらず、何とはなしに「加耶の鉄が製鉄の民と共に日本へやってきて、その鉄の歴史が古代日本誕生のドラマの中で数々の役割を演じてきた」と。

1. 吉備・出雲神話と鉄のかかわりと各地に残る古代「鬼伝説・羽衣伝説」
2. 出雲荒神谷に忽然と消えた青銅器文化と鉄のかかわり
3. 鉄とともに忽然と現れた四隅突出方墳から巨大前方後円墳への墳墓の変遷
4. 大和連合日本統一にはこの加耶の鉄が決定的役割をはたしたのではないかなど々。

自分のもっばらの関心事は「これら日本で起こった数々の事象・伝承が実際の大陸・朝鮮との交流史の中に於いて、考古学でかつ日本・朝鮮・中国での製鉄・鍛冶遺跡発掘で信憑性を持って語られているのか」「本当のところ 日本の鉄のルーツはわかってきたのか・・・」そんな興味を持って このシンポジウム聴講。

昨今の古代史ブームの中 もっとも興味を持たれている「古代日本のルーツ」にかかわる「朝鮮加耶と

の交流」がテーマであり、専門家ばかりでなく、各地の文化財保護に関わる人 そして私みたいな素人など 席が指定されるほどで、国立歴史民俗博物館の大ホールが満席の盛況であった。

12.1. 弥生時代には日本自前の鉄はなかった？ — 日本古代 鉄 の 歴 史 —

弥生の時代の始まりは鉄器使用に裏付けられた水田稲作によると言われる。`、
 しかし、現状弥生時代には種々の鉄製工具が使われ出したが、いずれも日本で作られた鉄ではなく、大陸から持ち込まれた物と見られている。
 一番古いもので紀元前2世紀頃から日本各地で鉄斧など鑄鉄製品が出土しているが、これらはすべて大陸からもたらされたもので、日本で鑄造された痕跡はない。
 九州テクノ大野正巳氏らの鉄器遺物 鍛冶スラグなどの分析を通じた整理等をベースにシンポジウムでの諸氏の話をもとめ、日本での鉄の歴史を次のように整理した。

表 日本古代 鉄 の 歴 史

BC 800	600	400	300	200	100	0	100	200	300	400	500	600	700	800	1000	1500
▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼
縄文晩期			弥生前期			中期	後期	古墳前期	中期	後期	飛鳥	奈良	平安		室町	
【鑄造破片再生の時代】								【本格鍛冶の時代】				【鉄の量産化の時代】				
日本古代 和鉄の歴史							【原始鍛冶の時代】			【鉄生産・鉄の自給拡散の時代】						
										【鍛打伸展鍛冶の時代】			【鉄の多様化の時代】			

- 1. 縄文晩期 ~ 弥生前期 紀元前2世紀 ~ 紀元1世紀 【鑄造破片再生の時代】**
 中国・朝鮮半島との交流は縄文時代晩期には既に始まっており、中国にその起源をもつ鉄器が日本に現れ、その後弥生前期には中国で製造された鑄物製の鉄斧などの破片を日本で割るなどの再加工して使用する事が始まる。
- 2. 弥生時代中期 ~ 後期 紀元1世紀 ~ 3世紀初頭 【原始鍛冶の時代】**
 薄く板状に鑄込み表面脱炭された素材が日本に持ち込まれ、曲げなど簡単な鍛冶が行われる。
- 3. 弥生時代後期以降 ~ 古墳時代中期 2世紀 ~ 4世紀 【鍛打伸展鍛冶の時代】**
 中国では脆い鑄鉄鑄物ばかりでなく、鉄鉱石を低温還元焼成してつくられた塊状鍊鉄が得られるようになり、日本では、脱炭鑄鉄と同時にこれらを素材とした鍛鍊加工(原始鍛冶)がスタートし、次第に本格鍛冶へと移って行く。
- 4. 古墳時代初頭以降 初期 ~ 中期 3世紀前半 ~ 5世紀 【本格鍛冶の時代】**
 大陸では塊状鉄精鍊が本格化し、鍛冶材料として広く流布。朝鮮半島でもこの塊状鉄精鍊がスタートしたと見られるが、はっきりしない。この当時 半島朝鮮半島の南部辰韓・加耶と倭国との交流が始り、4世紀半ばには加耶が鍛冶加工された薄い鉄板(鉄)の供給基地として登場し、渡来人の交流と共に大量の鉄が鍛冶原料として持ち込まれるようになる。
 当初3世紀には北九州に限られた鉄の先進地が5世紀には瀬戸内・出雲・吉備・畿内へと東進してゆく。この間日本に於いてはこれら朝鮮半島から持ち込まれた鉄と共にこの鍛冶・加工に使った鍛冶炉跡や鍛冶滓が大量に見つかるようになる。
 5世紀後半になると畿内には大県遺跡など大規模な專業鍛冶集団が生まれて勢力を伸ばす。

5. 古墳時代中後期～飛鳥・奈良 5世紀末～8世紀【鉄生産・鉄の自給拡散の時代】

その始りはまだはっきりしないが、5世紀末から6世紀初頭にかけて 鉄鉱石原料とした箱型炉による製鉄精錬が日本国内(吉備)で始まり、鉄素材の自給が始まった。

また 国内に大量に存在する砂鉄を原料とした精錬も始まり、日本での鉄自給の波が西国から東へ広がって行く。

7世紀末から8世紀には現在の福島県原ノ町近傍(行方製鉄遺跡)まで広がりさらに、9世紀には青森岩木山北山麓での製鉄が確認されている。

6. 奈良・平安時代 8世紀～11世紀 【鉄の多様化の時代】

竪型炉が関東・東国に出現し、大型の箱型炉や鋳物遺跡の出現など鉄生産が日本全国におよび、鉄生産の多様化が進む。本格的な鋳物生産がはじまり鉄の多様化がはじまる。

7. 中世 15世紀以降 【鉄の量産化の時代】

高殿たたらが鉄山経営として成り立ち 出雲など中国地方の生産が他を圧倒して行く

日本では縄文晩期に鑄造鉄斧があらわれ、弥生時代には数多くの中国製と考えられる鉄斧が出土しているが、日本で鉄が自給されるのは5世紀末から6世紀と考えられ、それ以前には鍛冶滓などはみつかったても、製鉄炉や精錬スラグは見つからず、自給の鉄精錬が行われた痕跡は見つかっていない。

5世紀末 千引カナクロ谷製鉄遺跡等吉備の国で大陸と同じ方式の鉄鉱石原料とした鉄精錬が現れ、6世紀になると国内に大量にある砂鉄を原料とした製鉄炉もあらわれ、九州・西国から東へ急速に鉄の自給が進んで行く。

このことから 「鉄の時代の始まり=弥生時代」といわれるが、自前の鉄文化が日本で根付くのは大和朝廷が成立する飛鳥時代以降と言う事になる。

● 弥生時代 中国から移入された鑄造鉄斧等の鉄器類



弥生時代には大量の鉄斧が中国から伝来したが、これらの鉄斧表面は再加熱による表面弾炭処理が施され、硬くて脆い高炭素鑄鉄(白鉄)の表面にねばい脱炭層が付与されている。日本に鉄器が伝来した初期から高度の加工処理が施されていた。

また、これら日本に伝来した鉄斧は工具として使われたのみならず、この鉄斧や折損破片を鉄素材としてさらに鍛打・研磨・剥ぎ取りなどの技法により、工具に再生された。

弥生時代後期になる表面脱炭した薄

い鑄造鉄板が伝来し、簡単な加熱曲げ加工が始まる。(原始鍛冶)

当時 中国は前漢の時代。前漢は全国に46の鉄官を置き鉄の生産すべて官営として管理下においた。これらの鉄が朝鮮半島に置かれた楽浪郡等4郡の交易基地を通じて日本にもたらされたと見られている。また、弥生後期から古墳前期にかけて、鉄鉱石を直接還元して鉄を作る塊状錬鉄法がおこなわれるようになり、脆い鉄に替わって ねばい鉄が得られるようになり、鍛冶材料として広く交易商品として中国朝鮮で流通するようになる。それらも日本に伝来し、本格的な過熱鍛冶が始まる。当初は中国製がそのまま日本にもたらされるが、次第に朝鮮半島で鍛冶加工されたり、朝鮮半島で製造されたものが日本

にもたらされる。特に4世紀 朝鮮半島の南端に近い加耶はこの鉄の生産・鍛冶・交易の中心地となり、日本にもたらされる鉄鍛冶材料も飛躍的に増大。
この朝鮮からもたらされた鉄は冶具や水田耕作などの道具に鍛冶加工されたばかりでなく、武器としても広く用いられ、この朝鮮の鉄の派遣が日本(倭国)各地に起こった諸国の勢力争いの重要な武器となり、この中から大和連合が生まれ、日本を統一して行く事になる。



日本最古の中国製鉄斧が出土した
福岡県曲り田遺跡



日本出土各種鉄器



近畿最古の鉄の斧
京都府 扇谷遺跡/弥生前期末~中期初頃

近畿最古の鉄斧が出土した
京都府 丹後扇谷遺跡



鉄の斧
長15.1cm/
福岡県 比恵遺跡/弥生中期後半

福岡県比恵弥生遺跡から出土した中国製鑄造鉄斧 断面 弥生時代 中期 今から約2000年前



福岡県比恵遺跡出土 中国製鑄造鉄斧 弥生中期 約2000年前
紀元前 中国では 既に鉄の精錬とともに 高度な熱処理技術が存在
その技術は現在にも通じる匠の技である

2. 「加耶の鉄を巡る古代日本の派遣争い」それが日本を造っていった



中国製の鑄造鉄が大量に日本に移入された弥生時代 大陸との交流の主は朝鮮半島を通じてであり、中国では漢が成立し、紀元前2世紀末には全国46ヶ所に鉄官をおき、周辺諸国に主として鑄造鉄器供給をすると共に鉄を支配。倭・朝鮮諸国へは朝鮮半島に置いた楽浪・帯方郡など4郡を通じて供給された。
その後、朝鮮半島では中国の鉄素材を板状鉄斧等に鍛冶加工するとともに製鉄の技術もつたわったと考えられ、朝鮮で鉄鉱石精錬された鉄が交易の中心として倭に持ち込まれるようになる。

2,3世紀になると中国歴史書に倭の記事が載るようになり、中国・朝鮮半島との交流が盛んになり鉄は重要な交易品となっていることが解る。

2世紀 「後漢書・東夷伝の弁辰条」には「国出鉄、倭・馬韓並従市之」の記述があり、「南部弁辰の地（弁韓後の加耶地域）で産出する鉄鉱石の製練（鍛錬）が行われ、その鉄を倭・韓の人たちが買っていた」との記述がある。おそらく斧状鉄板とみられている。

3世紀 卑弥呼が魏に遣使を送ったのが AD239 であり、「魏史・東夷伝の弁辰条」AD286 にも朝鮮半島南部弁辰の地（後の加耶地域）が「国出鉄、韓・倭、皆従取之」の記述がある。



吉備の遺跡ら出土した中国製 鉄てい



朝鮮半島から日本等周辺諸国へ交易された鉄てい

4世紀になると朝鮮半島では馬韓・弁韓・辰韓そしてそれらを引き継ぐ百済・加耶・新羅の三国時代になるとその地方にある鉄鉱石を原料とした精錬・製鉄が盛んに行われるようになり、これらの国から周辺諸国・中国への鉄の輸出もさらに活発になったと推定されている。

4世紀半ばこれらの地域で斧状鉄板から鉄への形状変化がおり、鉄生産の中心をになった加耶など朝鮮半島南部から日本に製鉄素材として大量に日本へ持ち込まれるようになる。

この頃 高句麗の南下・漢の4郡の衰退による朝鮮半島の鉄交易先の変化そして朝鮮3国の勢力の変化など中国・朝鮮での勢力変化が頻繁に生じ、鉄の倭に対する供給基地であった加耶を中心とした朝鮮三国と倭の関係も鉄の覇権・文化交流も大きく揺れ動く事になる。また、これら大陸の先進文化と共に朝鮮各地から数多くの渡来人が日本にやってくる。

特に鉄の入手は日本国内諸国最重要項目であり、くるくると変わり行く朝鮮の情勢。鉄の入手・鉄の自給への道を巡って多くの交流があり、鉄の覇権をめぐる日本国内諸国の争いを経て、古墳時代から飛鳥時代への変遷 大和を中心とした連合による日本統一へと進んでいったと見るのも一つの側面であろう。

「加耶の鉄」を巡って「大陸から朝鮮・対馬をへて北九州・日本へ」壮大な古代「鉄の道」が大陸から海をわたって日本・畿内へと続いている。

第5回 暦博国際シンポジウム「古代東アジアにおける倭と加耶の交流」に参加して

『加耶の鉄と倭国』

【完】